

## 性格特性を考慮に入れたオンラインでの同調実験 -対面状況での実験との比較-

井上 雅史<sup>†</sup>東北工業大学<sup>†</sup>

### 1 はじめに

集団内での同調傾向と性格特性との関係が、対面環境において調べられている [1]。この先行研究では、判断課題において同席する他者の回答に同調する傾向が協調性と相関し、神経症傾向や勤勉性とは相関しないことが示唆されている。同様の関係性が、非対面のオンラインでの環境においても同様の傾向を示すのかを確認する。

### 2 方法

#### 2.1 性格調査

先行研究と同様に、質問紙による性格特性の調査と心理実験とを組み合わせる。性格特性については、TIPI-J [2]を用いて調査した。10項目の質問の回答結果を用いて外向性・協調性・勤勉性・神経症傾向・開放性の5因子を測定し、得点化する。先行研究では実験前に紙により調査を行っていたが、オンライン環境を設定した本研究では、実験参加者は Google フォームを用いて回答した。質問紙への回答に要する時間は5分程度である。

#### 2.2 同調実験

同調傾向を調べるために、アッシュの同調実験 [3]を使用する。ここでの同調とは、集団の中において、自分の意見が正しいと思っても自分の意見を否定して、周りの意見に従うこととする。アッシュの同調実験では、出題された問題に対する正解が明らかな場合であっても、周囲の人々が不正解の回答をした場合には、自分も不正解の回答を選択してしまうという、同調傾向があることが示されている。

本実験は、4名1グループで実施される。4名のうち3名は実験協力者であり、この実験の意図を把握している。残り1名は実験参加者で、この実験の目的を知らない。本研究では、グループの構成員は直接対面することはなく、オンライン会議ツールである Zoom を通じて実験に参加する。Zoom の画面上で問題を提示され、口頭で回答する。すべての設問において、回答は3名の実験協力者がまず順に行い、最後に実験参加者が回答する。グループ構成員はカメラをオンにしており、他の構成員に顔が見える状態であった。設問は実験実施者<sup>1</sup>によりプレゼンテーション資料の画面共有として提示された(図1)。設問はすべてのグループで共通の10問から構成される。同調実験に要する時間は10分程度であった。<sup>2</sup>

グループ構成員が回答を求められる設問は、5問の非圧力試行と5問の圧力試行に分けられていた。圧力試行に対応する問題においては、実験協力者全員が間違えた回答をする。このようにして実験参加者に同調圧力をかける。もし実験参加者が圧力試行下で間違えた回答をしてしまった場合、同調が生じたとみなす。圧力試行の内で同調が生じた割合を同調率とする。非圧力試行は回答の正誤にかかわらず、同調率の計算には用いない。

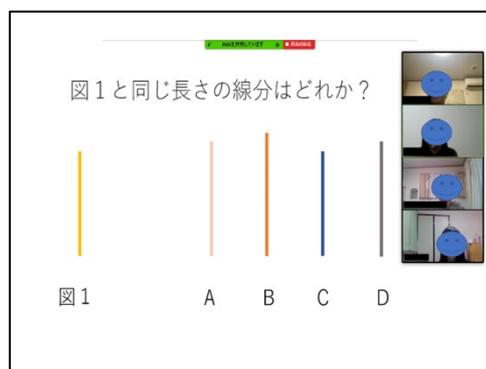


図1 共有されたスライドと参加者の様子

Online conformity experiments considering personality traits  
†INOUE, Masashi, Tohoku Institute of Technology

<sup>1</sup> 実験は吉澤亮によって実施された

<sup>2</sup> 東北工業大学の倫理委員会の承認を得た。

### 2.3 設問内容

提示される問題は、以下の通りである。

1. 線分比較問題（無色）
2. 線分比較問題（着色）
3. 図形計算問題
4. 算数正誤判定問題
5. 再認記憶問題

このうち、1番はアッシュの実験と同様の問題で、複数の線分の中から、例として示された線分と同じ長さの線分を選択するものである。2番は1番の線分に色を付けたものであり、図1の中央に示された資料共有画面に対応する。これらは、知覚に関連する問題群である。3番は図形の面積を計算する問題、4番は計算を含む算数の地岸を問う問題であり、思考を必要とする問題群である。5番は記憶力を確認する問題である。先行研究では、計算などの思考が要求される問題において、同調率が高まることが指摘されている。

### 2.4 実験協力者および参加者

実験協力者3名は実験実施者の知人である大学生で、すべての実験回において共通である。実験参加者は大学生6名で、各実験回に1名ずつ参加した。実験参加者には、実験終了後にデブリフィングを行い、実験意図を説明したのち、データ利用に関する同意の確認を行った。

## 3 結果

オンライン環境においても、対面環境同様に、同調傾向がみられた。実験参加者全員が少なくとも1回の同調行動をとっており、平均の同調率は43%であった。先行研究の対面環境での平均同調率は33%であり、オンライン環境では同調圧力が強かった可能性がある。

問題ごとの同調率に関しては、3番の図形の計算問題において最大の67%、4番の算数正誤判定問題で50%のそれに次ぐ同調率であった。これは、対面環境での先行研究において、4番の問題が最大の同調率60%、3番の問題でそれに次ぐ同調率40%となったことと、似た傾向であり、オンライン環境においても思考を要求される課題において、同調しやすくなると考えられる。

次に、性格特性と同調率の関係を確認する。先行研究において、他の性格因子と比べて特に強い正の相関( $r = .43$ )が見られた協調性のデータを散布図にしたものが図2である。オンライン環境でのデータを図にしたものが、図3である。どちらも横軸が協調性のスコア、縦軸が同調率であり、各点が実験参加者に対応する。オンラインにおいても、対面と同様に協調性が増すと、同調しやすくなる傾向が確認できる。

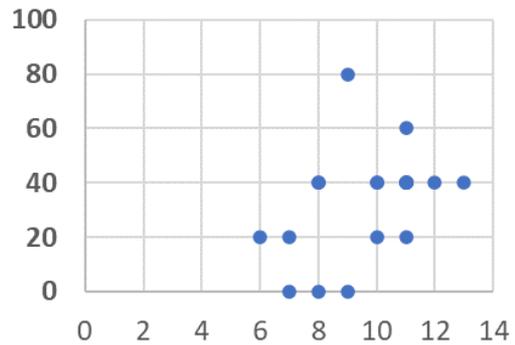


図2 対面での協調性と同調率の関係

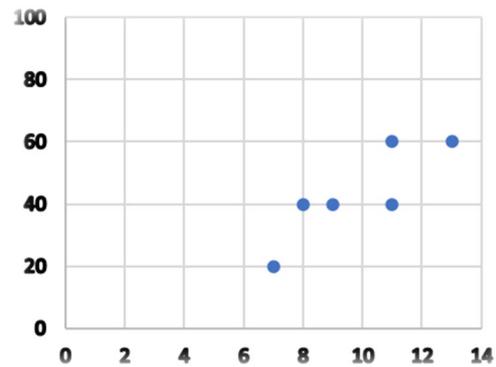


図3 オンラインでの協調性と同調率の関係

## 4 おわりに

対面環境で実施された性格特性と同調傾向に関する実験結果は、オンライン環境でも同様に成立することを示唆する結果を得た。実験参加者数の追加による結果の信頼性向上や、対面とオンラインのハイブリッド環境における性格特性と同調傾向の調査などが、今後の課題となる。

## 参考文献

- [1] 大友開, 井上雅史, “同調実験における性格特性と同調傾向,” *信学技報*, 第巻120, 第136, pp. 1-4, 2021.
- [2] 小塩真司, 阿部晋吾, P. Cutrone, “日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み,” *パーソナリティ研究*, 第巻21, 第2, pp. 40-52, 2012.
- [3] S. E. Asch, H. Guetzkow, “Effects of group pressure upon the modification and distortion of judgments,” *Groups, leadership and men; research in human relations*, Carnegie Press, 1951, p. 177-190.